法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

鴻慶寺石窟第一窟について

KUNO, Miki / 久野, 美樹

```
(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
HOSEI-SHIGAKU: Journal of the Hosei Historical Society / 法政史学
(巻 / Volume)
84
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
20
(発行年 / Year)
2015-09-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00022254
```

鴻慶寺石窟第一窟について

は じ めに

期と唐の二 各図像について積極的な比定作業、美術史的評価がなされ 史上極めて重要な石窟であるにもかかわらず、従来窟内の ていなかった。そこで本稿ではこの鴻慶寺第一窟のみを取 窟は現存最古の類に入る西方浄土図浮彫を有する仏教美術 には洛陽八関の一つ函谷関がひかえる。本石窟には北魏後 メートルの白鹿山の崖壁上に鑿たれ、石窟の南に澗河、 洛陽と長安を結ぶ崤函古道沿い、羲馬市にある標高四三五 鴻慶寺第一窟は中心柱を有し、 鴻慶寺石窟 図像と様式、制作年代等について論じる。 |期に計八窟が造られ、最も北にある北魏窟第一 (以下、「鴻慶寺」と略称することあり) は 窟全体の平面は間口 東

> 模である。また全体として北東に一二○度傾き南東に門口 メートル、 奥行六・五メートル、高さ六・一メー トル 0) 規

美

樹

、釈迦関係の造形

を開いており、前方のほとんどが崩壊破損する。

(1) 定光仏授記本生図 (図1) とアショーカ王施土因

縁図 図 3)

ていたと推察され、このうち第一龕、 右 下方には龕高一三五センチの四大龕が並び、左(向かって 三五個がうがたれ(図4下方)、正壁全体を上下に分ける。 中央横一列に高さ二五センチ~三五センチの小型尖拱龕 正壁は幅六・一メートル、高さ六・一メートルあり、 の第一龕から第三龕の中には一中尊二脇侍像が彫られ 第二龕各中尊像は高 壁 面

鴻慶寺石窟第一窟について(久野)

て破損して元の姿がわからない。禅定印趺坐像が彫られていた可能性がある。第四龕像は全めの台座痕跡から交脚像、第三龕中尊像は低い方形台座にめの台座痕跡から交脚像、第三龕中尊像は低い方形台座に

される浮彫がある。 光仏授記本生図、右側にはアショーカ王施土因縁図と推察のの、多くの精彩ある魔衆群を残す。降魔図の左側には定る降魔図(図4)が浮き彫りされ、中央の釈迦像を失うも正壁上方の中央には幅三・五メートルにわたり後に述べ

を屈する。如来立像の左右には、宝珠形と思われる頭光を腕も曲げて腹前で掌を仰向け、第一、二指を伸ばし他の指もつ頭部は失われ、右腕は屈し胸前で施無畏印をとり、左もつ頭部は失われ、右腕は屈し胸前で施無畏印をとり、左もつ頭部は失われ、右腕は屈し胸前で施無畏印をとり、左もつ頭部は失われ、右腕は屈し胸前で施無と思われる頭光を体に双領下垂式に衣を纏う。楕円形に近い宝珠形の頭光をはている。定光仏メートルは高さ三鴻慶寺の定光仏授記本生図は幅一・四メートル、高さ三鴻慶寺の定光仏授記本生図は幅一・四メートル、高さ三

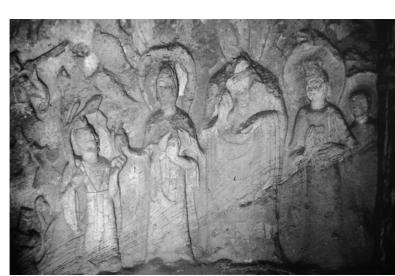


図 1 定光仏授記本生図

薩像 像を仰ぎ見るように立つ。 数体の頭光をもつ比丘像があり、 損した一茎の蓮華を受け取ろうとする。 H ち b しとなるが左手の二つの蓮蕾は失われ、 た三本の茎、右手に蓮蕾の た左菩薩像は両手で胸前に半開の蓮華の花らしきもの 0 長身 0 に当て、 四分の三ほどの背の高さで儒 0 像は蓮蕾を持つかと思われる左手の甲を表に向 菩薩立像が各一体ずつ配される。 右の手を軽く屈して儒童菩薩から花部分を破 儒童菩薩像は左手に蓮蕾の うい た四本の茎を握 右菩薩 童菩薩像が左の 右手の二つの 菩薩像の 像の右 宝冠をつけ る。 側 には、 周囲には 繰り返 蓮蕾 菩薩 を持 0 菩 11

があり、 李静 構成には大きく分けて「異時 じめとする北 ガンダーラ、アフガニスタンにあり、 「中央の定光仏を大きく表す礼拝像形式」の二つの形式 両氏の詳 窟前室 雲岡 東壁上方には、 石窟には両形式がみられる。 魏の造形に伝えられた。 :細な研究がある。 定光仏を中心に大きく表現す 同 図 定光仏授記本生図 法 0) 定光仏授記本生 それが雲岡 説話的な表現形 例えば雲岡石窟 石窟をは 0 図 源は 式 0

も、ここでは当初から表現されていなかったと考えられる。

国北朝期の定光仏授記本生図については、安田治樹、

童菩薩が定光仏に髪を踏ませる場

も破損する。なお、

ガンダーラの作例にみられるような儒

面は破損箇所を考慮して

髪 持ち、 0 何より、 薩は右手に四茎の蓮華、 Ŧī. 定光仏像の右に小さく表された儒童菩薩像が に散花し、 起經』、『太子瑞應本起經(6) 記述に近い。 る蓮華の茎を持ち、これは 雲岡石窟第一二窟像の儒童菩薩は五華をつけた一本にみえ を受け取るのも定光仏ではなく右脇侍菩薩像である。また、 立. 蓮華を渡す行為と関連性を見せるものの、 化が進み、 形式の範疇に入る。 そして鴻慶寺石窟の定光仏授記本生図の構図もまた礼 る礼拝像形式の定光仏授記本生 の場面 みで、本図が定光仏授記本生図であるとわ |茎に二茎を合計した七茎という数字のみを守 一像を各一体従え、仏菩薩の三尊形式をとる上、 五茎という数字が守られているが、 が省略される。 鴻慶寺石窟では雲岡石窟まであった儒童菩薩の 後に二花を散じている。 定光仏はやや儒童菩薩に体を傾け、 他の定光仏授記本生図の出典である しかし、 蓮華 左手に三茎の蓮華を持つ。 では、 『四分律』 鴻慶寺 の茎を儒童菩薩像 図が彫られ 初め五花の蓮華を定光仏 雲岡 0 例 の「五花共一 石窟 ではさらに てい 鴻慶寺石窟では 両脇に脇侍菩薩 かる 五茎 ② 2 る が ŋ 儒童菩薩 蓮華 持 0 『修行本 ジ蓮華を 茎 そして 儒童菩 礼 図 つこと $\frac{1}{2}$ 'n 拝 拝 0 像

さ三メートルの方形浅龕にアショーカ王施土因縁と思われ、正壁の降魔図をはさみ右側には、幅一・二メートル、高

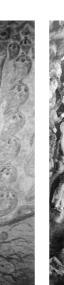


図3 アショーカ王施土因縁図(旧写真)

記本生図と対で表される事、フガニスタンに源があり、ト

このアショーカ王施土因縁の主題もまたガンダーラ、

T

、雲岡石窟でもこの二主題が同しかも彼の地で前述の定光仏授



図 2 雲岡石窟定光仏授記本生図

アショーカ王施土因縁は、土遊びをしていた子供が釈迦る図が浮き彫りされる(図3)。

れるアショーカ王になったという説話である。

に土を施した功徳の結果、

やがて転生して転輪聖王と称

両手を胸前に置く菩薩立像二体を配す。 合う比丘立像各 の方に体を向ける。 上の一体は仏像と同じ方向を向き、 推察される。仏立像の前には上下に比丘立像各一体があり、 を破損するが、 る。 衣の先を掛けた左腕を軽く屈して楕円形の鉢を下に向 に四分の三体を左に傾け立ち、 うな房状のものが複数下がる。 端には龍頭があり、 つ立派な天蓋の下に配される。 列の鱗紋、 釈迦仏立像を中心とする一群の像は、 その鉢の先には、 その下に鋸歯紋、 アショーカ王施土因縁図を表現していたと 体、 そこから漢代の使者がもつ節につくよ 仏立像の後ろには、 その下に仏立像と同じ方向を向き、 何かを差し出す両手が見え、 双領下垂式に衣を纏 中央の仏立像は壁面 帷を垂らす。天蓋の すなわち、 下の一体は合掌して仏 上方に合掌し向き 四本の柱により立 天蓋は最上 童子 左右 0) 中 部 像 央 大

四

とわかる。

とわかる。

とわかる。

とわかる。

とわかる。

とわかる。

とわかる。

とわかる。

電中に一如来二菩薩立像を彫り、如来像の左下に跪く童子門石窟古陽洞北壁第一六五龕像と指摘する。そこには楣拱に「定光仏」とする例が多く見られ、その最も早い例が龍に「定光仏」とする例が多く見られ、その最も早い例が龍を光た北魏後期以降、造形はアショーカ王施土因縁図圏が多く見られ、その最も早い例が龍さて李静傑氏は、雲岡石窟で定光仏授記本生図、アショーさて李静傑氏は、雲岡石窟で定光仏授記本生図、アショー

仏授記本生図、アショーカ王施土因縁図を混合して表現しされている。こういった事から、鴻慶寺石窟の例は、定光光石像一区並二菩薩」の銘があり、本例以後、東西魏、北斉、米石像一区並二菩薩」の銘があり、本例以後、東西魏、北斉、の痕跡が残る。説話性は失われ礼拝像形式が進んでいる像の痕跡が残る。説話性は失われ礼拝像形式が進んでいる

(2) 降魔図 (図4~図6)

ない最後に近い例と言える。

正壁上方中央には幅三・五メートル、高さ三メートルの



図4 降魔図

鴻慶寺石窟第一窟について(久野

提樹 失わ 降魔図 寸 る 手で剣を横にして持ち、 武装し猿顔をした魔王波旬と思われる人物が立ち、 見える。 形がみられる あるような樹 いは釈迦から発せられた光、 かと思われるふっくらとした五枚の蓮華の花びらのような 扇を持つ魔王の三人の娘たちが (図5)。魔王の後ろには被り物をつけ この下方には、 九 0) その花びら形の左には、 その上方と左側に、 [木表現の菩提樹が残る が (図 5)。 ある。 元来成道像の光背に沿い付けられ 降魔図中央下部 それらは放射状に並ぶため、 右手で三個の蓮蕾のつい あるいは炎の表現のようにも 洛陽出 いる。 中央向きで三角帽を被り 土北魏孝子石棺浮 **図** の釈迦成道像は今日 5 丸 e V 鏡あるいは 左 た茎を執 腰に左 ていた 側 ある 膨 0) 菩 13

には、 半身裸形で短い腰巻をつけ、 釈迦像に向け攻撃を仕 娘たちを除き九体の魔物たちが、 頭が猪 にとる。 をかぶるもの、 ような物を持ち上げる 道釈迦像を失った中央龕の右には九体、 体 中には全身が蛇や獣 あるいは武装した猿もいる。 の髪を逆立てた人間形魔物が両手を挙げて上 髪の逆立ったものが各々弓矢、 掛ける。 (図4中央上方、 髪を結い上げるもの、 0) 魔物も 人間の形をした魔物は皆上 中央下方にかつてあった 本降魔図の中央上方 13 るが、 左には魔王と 6左上)。 体が人間で 槍などを手 三角帽 魔 0

Ш

完全に保存されてい 物たちは躍動感にあふ ħ ば中 れ その造形力、 国仏教美術史上屈指 規模から考えて、 の降魔図

あったといえよう。

点ある。 差異があるもの られる。 例が雲岡石窟にあったように、 さて、定光仏授記本生図、 雲岡 の八例のうち釈迦像、 Ó 鴻慶寺の降魔図と共通する形 アショー 降魔図も雲岡 魔物等の -カ王施 石窟 形 土因縁 式に 温に八例見 四縁図の前 が 次 細 か 兀 V

②雲岡第六、 降魔図 形で腰巻をつけ頭が猪、 の中央上方で山を持ち上げる魔 第一〇、 第三五各窟にも魔物の 猿のもの がいる。 物 が 中に e V 辛 身裸

③雲岡第六、 又は左から槍で攻撃する魔物の表現がある⁽³⁾ 釈迦を右上から弓矢で攻撃する魔物、 第一〇、 第 一二各窟の降魔成道 それと対称に左 図 中 中 央 0

(4) 主岡 石窟第一 ○窟の降魔成道図では、 鴻慶寺像と同 じょ の三

物語る。 0) で共通点をもつことは ようなものが雲岡石窟と鴻慶寺石窟の間であったことを 鴻慶寺石 殊に、 窟 0 降魔図 共通点③とした攻撃する魔物の が 降魔成道図を造形する際 : 雲岡石窟の降魔 成成道 図と形式 武器の位置 0 図像集 の上



図 5 降魔図魔王像部分



図 6 降魔図右上方部分

かな存在をうかがわせる。が雲岡の三窟と鴻慶寺で一致している点は、図像集の明ら

①雲岡の降魔成道図にはない菩提樹の表現が鴻慶寺にあ一方、鴻慶寺の降魔図と雲岡のそれで異なる点もある。

中央上方の目立つ位置に降魔図を配する。各々表現された仏伝図の一つであるが、鴻慶寺では正壁②雲岡の降魔成道図は、多くの区画に同じような大きさで

生の降魔図には、如来像上方に樹木表現がある。 素岡の降魔成道図になかった菩提樹表現が鴻慶寺に見ら まのである点から、洛陽城内外の仏教寺院に描かれた壁画 ものである点から、洛陽城内外の仏教寺院に描かれた壁画 などを図像として参照した可能性が考えられる。鴻慶寺の などを図像として参照した可能性が考えられる。鴻慶寺の として、龍門石窟路洞南壁上部西側にある北魏末東魏初制 として、15 などを図像として参照した可能性が考えられる。 書題の降魔図には、如来像上方に樹木表現がある。

行いを重視する意図が働いていたと推察する。いよう。鴻慶寺では制作に当たり降魔して成道した釈迦のは、その石窟における降魔図のもつ意味の軽重に関係してまた、雲岡と鴻慶寺における降魔図の位置、扱いの違いまた、雲岡と鴻慶寺における降魔図の位置、扱いの違い

(3) 愛馬別離図 (図7)

馬に城に帰るように促し、それを聞いた犍陟が「膝を屈し、林の中で愛馬犍陟(カンタカ)と別れる場面が浮き彫りされる。悉達太子は宝冠と円形頭光をつけ、長い裙をはいた相は『過去現在因果經』中、出家の場面で太子が侍者と愛れは『過去現在因果經』中、出家の場面で太子が侍者と愛れは『過去現在因果經』中、出家の場面で太子が侍者と愛れは『過去現在因果經』中、出家の場面で太子が侍者と愛れは『過去現在因果經』中、出家の場面で太子が侍者と愛れは『過去現在日果經』中、出家の場面で太子が侍者と愛れば『過去現在日果經』中、出家の場面で太子が侍者と愛れば『過去現在日界には、釈迦が出家した際、鴻慶寺石窟第一窟南壁左上方には、釈迦が出家した際、鴻慶寺石窟第一窟南壁左上方には、釈迦が出家した際、

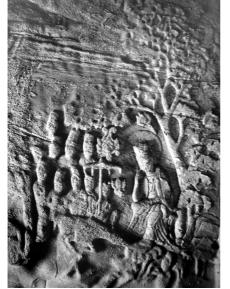


図7 愛馬別離図

うな人物七体ほどが浮き彫りされる。 う一体女性らしき人物、 面を表している。 足を舐め、 ような中原的表現である。 おおう。 の間から大樹が生え、太子をはじめとする人物像群全てを 樹木図は降魔図同様洛陽出土石棺に見られる松の 涙落つること雨の如し」であったと語られる場(s) 太子像の前には日傘を差す侍女一体とも 他に冠をつける漢民族の文官のよ 太子像の左下と岩場

うに思われる。

おおう表現は龍門石窟北魏窟に見られ、これもまた中原的図が表されない。太子と目される半跏思惟菩薩像を大樹が 愛馬別離図は確認できない。 (®) な表現と言えよう。しかし龍門石窟では貴人が跪くのみで 派な愛馬別離図である。 第六窟明窓西側像は太子の像高が約一・六五メートル に見られ、 愛馬別離場面はインドに前例はなく、 雲岡石窟に四例ない しかし雲岡の例にはいずれも樹木 し六例ある。このうち雲岡 ガンダーラにまれ の立

像を彫る説話図があるとするが、今日摩滅が著しく詳細を初転法輪図、同柱南面中央龕上方にも騎馬人物像と供養者 初転法輪図、同柱南面中像の痕跡のある大龕が一 論じることができない。 鴻慶寺石窟第一 窟には、 また、 箇所彫られ、 この他中心柱西 北壁下方の残存する二大龕 大龕上に鹿図を伴う 後) 面に五尊

鴻慶寺石窟第一窟について(久野

するが、摩滅部分もありこの主題と特定するのは難し 像痕跡の上方西側には比較的 『鴻慶寺石窟』 等は仏伝中の「宮中歓楽 -の「宮中歓楽・出城図」と鮮明な城と人物群像図があ ょ

る。

き釈迦の生涯が主題となっていることが理解できた。 る仏伝等が図像化され、修行者への授記、 定光仏から釈迦の前生の修行者への授記、 以上、 本窟 の奥壁、 左右壁部分、 中心柱 修行者が学ぶべ 降魔図を主とす の現存部分には

二、西方浄土図とその意義

中央の 西側には前述の愛馬別離図があり、 跡、 えて第一龕に交脚菩薩像、 佛並坐像の痕跡がある。 鴻慶寺第一窟南壁では下層の四大龕のうち西から東へ数 第三龕、 大画 置 形 第四龕に一仏二菩薩像の痕があ 式の浄土図である。 注目すべきはその右、 第二龕に何らかの像があっ その東側には釈迦多宝 る。 南壁上方 南壁上方 た痕

1 西方浄土図 (図8~11)

足を露出し趺坐する。 れた中尊像は頭部を失い全高は一五〇センチ、 を描いて連なる きく懸かる。蓮華座 くられ、下半身及び蓮華座蓮肉部分に半円を描くように大 九〇センチある。 化生像を配する。 本浄土図の幅は二・三メートル、高さは三・三メートルあ 中央上方に三尊坐像、 (図8、9)。 禅定印をとり、 少し彫り下げ窪んだところに浮き彫 の覆蓮の蓮弁は立体的な丸みがあり弧 長い裳には弧状の襞が左右対称につ その下方に蓮池、 衣を双領下垂式に纏 伎楽天、 膝張りは りさ 蓮華 e V 右

形 こちらも襞のある裳が下半身に大きく広がり懸かり、その 損するが禅定印をとっていたようである 蓮蓮華座があり、 座に趺坐する像があり、 はさみ対称の位置にも同様の大きさの仰蓮と思われる蓮華 センチの像が仰蓮の蓮華座に右足を露出し趺坐し、 頭 跡 跡 がある。 光 からは薄物を連想させる帯がひらめく。 が三 が見て取れる。 一尊像の周囲に認められ、 他にも菩薩形や僧形をした五、六体の 頭部を破損するが、 右坐像のさらに右側にも小ぶりの覆 破損著しいものの、 上方左端には楼閣の瓦 僧形で立つ人物像 (図8)。 やは 大きな坐像を 高い髻と宝珠 手は破)浮き彫 0 ŋ

ŋ 狼

> 屋根、 雲上の伎楽天らしき像の痕跡がある。

こに楽器を演奏する者、 に言う伎楽天の像と考えられる。 大きな三尊坐像の下部には蓮池があり 踊る者がおり、 これは **図** 8 ~ 『無量壽經 11)、 そ

菩薩の各像をあらわしていると考えられる。 土を表現し、 ているとみられる点である。 10)、『無量壽經』、『觀無量壽經』 (25) 開いた蓮華の上に坐る人物像を浮き彫りして 注目すべきは蓮池の中で多くの蓮蕾、 中央上方の三尊は無量寿仏、 従って、この大画面は西方浄 の説く三輩往生を表現し 開きかけた蓮華 観音菩薩、 おり 9、

2 制作年代と中国仏教美術史上の意義

その像の右側には、

中尊像より一回り小さい全高一一〇

ない。 年頃~五〇三年頃)⑤賀玉萍氏―北魏末から東魏 後期③石松日奈子氏―北魏末から東魏④河南省古代建築保(3)①宿白氏―五二八年の河陰の変前後②李文生氏―北魏 お 永寧寺木造塔の構造、 宿氏は熙平年間 護研究所 ŋ 鴻慶寺石窟に制作年代を示す有年紀造像記は残され 鴻慶寺第 鴻慶寺第一窟の制作年代についての従来研究は五 洛陽遷都に近い年代、景明年間を下らず(※) (五一六―五一八)洛陽城内に建立された 一窟は鞏義大力山石窟第一窟と共に永寧寺 仏龕の配置が本窟ときわめて似 である。 7 説



図 8 西方浄土図部分



図 9 西方浄土図部分

-



図 10 西方浄土図部分

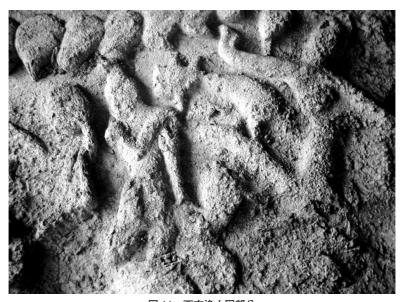


図 11 西方浄土図部分

五三 塔を模したものであろうとする。そして、 年代を五二八年の 鴻慶寺北壁西上方にみられる城楼檐下の人字形割束の曲 にある仏伝図浮彫例は、 が路洞中の屋形龕と同様であるから、 一四年頃 、までに造営されたと考える龍門路洞にみられ、 |図浮彫例は、宿氏が五二八年の河陰の変以後、 河陰の変前後とする。 鴻慶寺第一窟の制: 李氏は北魏後期 鴻慶寺第一窟 13 作 線

生図 千仏 槍 層龕外に左手で宝珠形香炉を掲げ立つ菩薩像などは、 第Ⅱ期窟との関係は密である。 る形式の類似から、鴻慶寺第一窟は北魏後期の作とする。(%) が雲岡にもみられる。 る。一つには、 前に造営された雲岡第六窟との関係は特に近いと考えられ も指摘するように、 魔物の武器のうち、 [第Ⅱ期の造形に近い。仏伝図が多いこと、 の方向も雲岡の降魔図と同じため、 本稿冒頭からみてきたように、 から重なり垂 の菩薩立像は 龕の存在 (図4下方)、また、鴻慶寺石窟の定光仏本 鴻慶寺第一窟奥壁を上下に分ける横一列 れる天衣の形なども鴻慶寺の菩薩像 長身痩せ型で(図1)、このような特徴 太和一八年 釈迦の右上からの弓矢、左上からの すなわち、雲岡第六窟中心柱 河南省古代建築保護研究所 (四九四) 鴻慶寺第一窟の内容は雲 鴻慶寺第一窟と雲岡 の遷都より少し 中でも降魔図 西 굶 **図** 下 0

する五二八年頃としておくのが妥当と考える

0) 岡

の蓮華座をはじめ、世正光六年(五二五)二 正光六年(五二五)五月一五日銘南壁第六〇龕龕楣の宝珠聖像が坐すたっぷりと丸い蓮華座の表現は、龍門蓮華洞の 1 上 五一〇年よりも前になる可能性すらある。 だこの現象が現れていない点、 ショーカ王施土因縁図の混合形が見られ、 平三年 (五一〇) 0 0) つくりは、 縁図にみられる天蓋の横二列の鱗紋、その下 一様々な要素から、 鴻慶寺アショーカ王施土因縁図の件で触れたように、 南北壁上方に見られる紋様と同様である。さらに、本稿(%) のそれと近い。そして、鴻慶寺のアショーカ王施 五一七年頃までに造営された龍門 龍門古陽洞龕像で定光仏授記本生図とア 蓮華洞 鴻慶寺第一窟の制作年代は古 の北魏窟龕浮彫にみら 鴻慶寺第一窟の造営年が 加えて、 鴻慶寺では未 石窟賓陽中 0) 宿 鋸 れる。 氏の提示 歯 西方三 紋 土 洞 因

造営された鞏義大力山

石窟内の中心柱四面上下に龕を設け

注目されることがなかった。 ているであろう」と一言述べるのみで、これまでほとんどにもかかわらず、李文生氏がわずかに「西方浄土を表現し る西方浄土図という極めて美術史的価値 本図については、中国における最初期の 0 高 大画面形式によ い浮彫である

従来知られている南北朝期の

西方浄

土 一図には、

麦積

石

され、 麦積 寺址 図40 窟 図は、 違う。 表現 同じく北斉の小南海中窟西壁の九品往生図が挙げられる。さらに北斉に造られた南響堂山石窟第一洞、第二洞浮彫、 唐の西方浄土図につながる要素をもち、 間表現にのびやかさがない。 教美術史の常識を塗り替える造形である。 を有する宝池が四角く太い陽刻線で囲われ、 れと似ているが、 大きく中央に表現する南響堂山 なり一 のごとく北魏後期 一二〇窟の西 その無量寿仏像を中心軸にして左右下方が末広がりと 、こと手こ告られた南響堂山石窟第一洞、第二洞浮彫、(出土の浮彫が西方浄土を表現している可能性があり、(生) 0 は鴻慶寺の西方浄土図と異なる。 畄 また六世紀前半から中頃の南朝で制作された成都万仏 一二七窟)窟の西方浄土図に近い。下方に伎楽天像もあり、 強いていえば、 種の遠近法のような空間構成がなされ、このような 同じ宝池の中に西方三聖坐像と往生者像が浮き彫 九品往生図の構図は鴻慶寺石窟の西方浄土図と全く 壁画と成都万仏寺址浮彫は 岩 壁龕上に描かれた北魏末西魏の西方浄 南響堂山の西方浄土図では、 の制作と考えられるにもかかわらず、 無量寿仏をはじめとする三尊坐像を 近い。 この点鴻慶寺石窟の西 鴻慶寺 の西方浄土図が鴻慶寺のそ むしろ初唐の敦煌莫高窟第 画 また、 面奥に無量寿仏 0) これまでの中 ·西方净· 鴻慶寺石窟の立 全体として空 小南海中 蓮華化生像 土 図 は | 方浄土 前述 が 国 窟 初 仏 ŋ 0 华 土

> あろう。 るため、このように進んだ様式の西方浄土図を生んだので地が長安と洛陽という文化の先進地帯を結ぶ街道沿いにあ

結びにかえて

の造形と近い関係にあることが本稿第一節の考察で明らか鴻慶寺石窟第一窟の造形は、図像、様式面で雲岡第Ⅱ期

となった。

と合計一七例あり、その尊名は釈迦六例、釈迦・多宝二龍門の西方託生願望を明らかに示す造像記を改めて調 一九八九年以来指摘しているように、 (音) る内容と一致する。 勒交脚像、 容の状況は、 弥勒四例、 仏像を造り西方託生を望む造像記よりも多い。 仏並坐、 例となる。 鴻慶寺石窟 弥勒等の像を造り西方託生を望む造像記が無量寿 二仏並坐像の 無量寿二例、 鴻慶寺第一 釈迦像等を彫り西方往生を願う龍門造像記内 は洛陽に近く、 窟 痕跡もあり、 観世音一例、 0 その洛陽 釈迦 関係 龍門石窟には、 破損による尊名不明 釈迦や釈迦・多宝二 西方浄土図を造形す 0) 南に 0 釈迦·多宝二例 浮 は鴻慶 彫を有し、 そういった 著者が ②寺と同 がべる

また本稿第一節では、鴻慶寺第一窟の主題として、修行

え、あえて本稿を記した。

洞 石窟」「先修石窟」と称したという民間伝承があり、(雲) 慶寺石窟第一窟と龍門石窟では、基礎となる信仰は釈迦、 ける場であった事が起因しているのではないだろうか。(*8) 賓陽中洞に大きな本生図が彫られていたが、仏伝図は魏字 彷彿とさせる。一方、 鑿され、人里離れた場ではなかったが、 とができた。鴻慶寺石窟は洛陽と長安を結ぶ街道沿 者への授記、 なっていたために、 弥勒を中心とする共通の内容であったが、石窟の機能が異 いうよりは皇帝から一般人に至るまで供養のための龕を設 13 の主題、伝承共に出家者の修行のための場であった過去を に相違がみられた。これは龍門北魏窟が、 の龕楣に小さく彫られるなど、鴻慶寺第一窟と主題の扱 修行者が学ぶべき釈迦の生涯の主題をみるこ 造形のあらわれ方に相違がみられたと 同じ北魏期に造られた龍門石窟には 本石窟 修行者の場と には 「仙修 、に開

窟がもつ最初期の西方浄土図の存在価値を伝えたいと考でも、鴻慶寺第一窟の彫刻そのものの質の高さ、さらに本も提出されかねない。しかしそのような問題を乗り越えてな状態の資料から図像、様式の考察をおこなうことに疑問形を資料として扱う美術史学の立場からすると、このよう本窟の破損摩滅の程度は著しい。一般に良質で完全な造

なお、

本文で述べる通り、

鴻慶寺石窟は北東に一二〇度

註

 $\widehat{1}$ ている。 〜一三三頁を参考に、著者が二○一四年一二月に現地調査 版社、二〇〇八年、一二六頁。 地に立ち寄り本石窟寺の名称を鴻慶寺に改名したと記録し での碑刻九基が残り、このうち明の碑は、 をおこなった。鴻慶寺石窟には唐聖暦年間から清に至るま 内容、方角、寸法については前掲 河南省古代建築保護研究所編 前掲『鴻慶寺石窟』一 四九頁。 鴻慶寺石窟第一窟の造形 『鴻慶寺石窟 『鴻慶寺石窟』一二七頁 則天武后がこの 中州古籍

2 る。 寺石窟』。 方浄土図について比定作業がおこなわれていない。 伝美術の主題については言及するものの、本生・ 龍門石窟(一)』平凡社、一九八七年。前掲註(1)『鴻慶 鴻慶寺石窟を専論する従来研究には次のようなものがあ 九五六年第四期。 外文出版社、二〇一〇年。 兪剣華・于希寧「澠池鴻慶寺石窟」『文物参考資料 楊超傑 『洛陽周囲小石窟全録』第二巻一頁~五 李文生「澠池鴻慶寺石窟」『中国 いずれも鴻慶寺第一 因 窟の仏 西 七

推察する。

の記す方角と前掲兪剣華・于希寧論文、李文生論文の記録傾き南東に門口を開いているため、前掲註(1)『鴻慶寺石窟』

- の第一窟が兪・于論文では第四窟に当たる。 であるが、兪・于論文では南から編号するので『鴻慶寺石窟』であるが、兪・于論文では南から編号するので『鴻慶寺石窟』と李論文は同じ壁とするのが、兪・于、李各論文では北壁とされる。また石壁とする方角が九○度ずれ、前掲註(1)『鴻慶寺石窟』が西(奥)
- (3) 安田治樹「雲岡石窟の彫刻にみられる本縁説話―アショー(3) 安田治樹「雲岡石窟の彫刻にみられる本縁説話―アショー・ 一七・一八号、一九九九・二〇〇〇年。安田治樹「ガンダーー七・一八号、一九九九・二〇〇〇年。安田治樹「玄ど仏授記本生図の二種の造形について」『美学美術史研究論集』 一三五 ラの燃燈仏授記本生図再考」『立正大学大学院紀要』二六号、二〇一〇年。
- (4) 『四分律』大正藏二二・七八四下~七八五下。
- (5) 『修行本起經』大正藏三·四六二上中。
- (6) 『太子瑞應本起經』大正藏三·四七二下~四七三上。
- 四二頁~四四頁。 れる本縁説話―アショーカ施土物語と燃燈仏授記本生―」れる本縁説話―アショーカ施土物語と燃燈仏授記本生―」(7) 安田治樹、前掲註(3)論文「雲岡石窟の彫刻にみら
- 七号、二○○八年、一一九頁。ショーカ王施土説話の受容と造像の背景」『奈良美術研究』七号、二○○八年、一一九頁。
- (9) 李静傑、前掲註(3)論文三○頁~三四頁、図一○。
- 術出版社、一九八七年、図一○の最も左に浮き彫りされた(10) 例えば、黄明蘭編著『洛陽北魏世俗石刻線画集』人民美

樹木図が近い表現。

- 洞南壁上層西部(西部分のみ残存) 8 第三五洞南壁西龕壁第三層西部⑥第一二洞前室天井東側折上部分南⑦第二九壁第三層西部⑥第一二洞前室天井東側折上部分南⑦第二九壁第一層南龕⑥第一○洞主室南壁下層中央龕③第八洞主室北壁(1) 雲岡石窟の降魔成道図①第二洞中心柱北面第一層中龕(摩)
- 本ずつ槍をかまえて攻撃する場面が彫られる。 降魔図には失われた釈迦像の右側にも二体の魔物が各々一(3) ただし、鴻慶寺石窟例の規模が大きいためか、鴻慶寺の
- (4) ただし、雲岡第一○窟浮彫の魔王は釈迦の右側に表され、(4) ただし、雲岡第一○窟浮彫の魔王は釈迦の右側に表され、
- 籍出版社、二〇〇六年、一頁~四三頁。本石窟の主題については、王振国氏により詳細な研究がなされ、『法華經』の一六王子を表現しているとされる。王振宮「龍門路洞調査報告」『龍門石窟典洛陽佛教文化』中州古
- (16) 『過去現在因果經』大正藏三・六三三中。
- (17) 雲岡石窟の愛馬別離図は①②第二洞中心柱西面第二層南

- を問わず貴人が跪く、供物を捧げるなどする像である。図九二、図九三。龍門石窟の樹下菩薩半跏思惟像は、男女(18) 前掲註(15)『中国石窟 龍門石窟(一)』図五七、図七八、
- (19) 兪剣華·于希寧前掲註(2)論文、四八頁。李文生、前掲

註(2)論文二五六頁。前揭註(1)『鴻慶寺石窟』一二八頁。

- 華・于希寧前掲註(2)論文では西面に当たる。 異なり、前掲註(1)『鴻慶寺石窟』で南面とするのが兪剣 胃頭で述べたように、本窟の方角の記述が従来研究相互で の剣華・于希寧前掲註(2)論文四八頁~四九頁。本文
- (21) 兪剣華・于希寧前掲註(2)論文四九頁。前掲註(2)論慶寺石窟』一三〇頁~一三一頁。李文生、前掲註(2)論たものであろう。」としている。
- (3) 楊超傑、前掲註(2)『洛陽周囲小石窟全録』第二巻図
- (24) 『浄土三部経(上)大無量寿経』岩波書店、一九六三年、
- (25) 前掲註(24)書『浄土三部経(上)大無量寿経』一六三

鴻慶寺石窟第一窟について(久野

- 頁~一六五頁、二〇四頁~二〇六頁。
- (26) 『浄土三部経(下)観無量寿経』岩波書店、一九六四年、
- 二三二頁~二三三頁。 註(2)『中国石窟 龍門石窟(一)』二一六頁、二二六頁、 (27) 宿白「洛陽地方における北朝期石窟の初歩的考察」前掲
- (28) 李文生、前掲註(2)論文二五四頁。
- 年、一七四頁。(2) 石松日奈子『北魏仏教造像史の研究』ブリュッケ、二〇〇五
- (30) 前掲註(1)『鴻慶寺石窟』一七三頁~一七四頁。本文()
- 年、一八七頁。(31) 賀玉萍『北魏洛陽石窟文化研究』河南大学出版社、二〇一〇内の西暦年は本稿著者。
- (32) 宿氏は路洞の南北璧の浮彫について仏伝図と称している
- 光仏本生図にある菩薩立像と共通している。『中国石窟 雲(33) 雲岡第六窟中心柱西面下層の仏誕生図に浮き彫された摩氏により『法華經』の一六王子図という解釈がされている。氏により『法華經』の一六王子図という解釈がされている。

岡石窟(一)』平凡社、一九八九年、図七三。

(35) 前掲註(2)『中国石窟 龍門石窟(一)』図八、九

- 巻二六八頁に彙一一六四拓本写真が掲載され、同二六七頁中華書局、一九九五年、二四一頁。本造像記は、『彙録』下正光六年銘に違和感はない。『二十四史(魏書)』第二三巻、正光は六年六月孝昌に改元しているので、五月一五日の
- (37) 『蓮華洞』科学出版社、二〇〇二年、九九頁、図一四五·

翻刻が掲載されている。

- (38) 李文生、前掲註(2)論文、二五九頁。
- (39) 宿白、前掲註(27)論文、二二六頁〔注49〕には、鴻慶(39) 宿白、前掲註(27)論文、二二六頁〔注49〕には、鴻慶

46

- 出版社、一九八七年、図五二~図五五。(40)『中国美術全集 絵画編17 麦積山等石窟壁画』人民美術
- 号一一九。(41) 『中国国宝展』カタログ、朝日新聞社、一八三頁、出展番
- 三二。の研究』創土社、二〇〇六年、一六一頁図三〇、一六二頁図の研究』創土社、二〇〇六年、一六一頁図三〇、一六二頁図(2) 勝木言一郎『初唐・盛唐期の敦煌における阿弥陀浄土図
- 雑集』第四号、二○○二年。 実践行と『涅槃経』『観無量寿経』の解釈を中心に」『鹿園(3) 稲本泰生「小南海中窟と滅罪の思想―僧稠周辺における
- 二四。(44)『中国石窟 敦煌莫高窟(三)』平凡社、一九八一年、図
- (45) 「造像背景としての生天、託生西方願望―中国南北朝期を

- 不完全であったことをここに記し、陳謝する。不完全であったことをここに記し、陳謝する。 一九八九年時点での著者の従来研究探索のがお摘していた点について、石川琢道氏著書『曇鸞浄土教が指摘していた点について、石川琢道氏著書『曇鸞浄土教が指摘していた点について、石川琢道氏著書『曇鸞浄土教が指摘していた点について、石川琢道氏著書『曇鸞浄土教が過過一条の思想的背景―』法蔵館、二○○九年において、本部、中心として―』『佛教藝術』第一八七号、一九八九年。なお、中心として―』『佛教藝術』第一八七号、一九八九年。なお、中心として一
- 資料(確認資料は略称で記述。資料の完全な名称は後述)以下のような凡例による。①制作年②造像記の位置③確認度とし託生西方願望を示す造像記」「無量寿仏を主尊とする意とし託生西方願望を示す造像記」「無量寿仏を主尊とする龍門石窟北魏窟にみられる造像記を「無量寿仏以外を主

④造形⑤造像記抜粋。傍線、() は著者

七仏、 X④三壁のうち正壁大龕主尊一仏、 考比託生西方妙樂國土值佛聞法見弥世勒・・□①孝昌三年 ②蓮華洞北壁第五四龕③彙一一三七拓本④一仏二菩薩過去 區・・託生西方□□□□□□之處・・□①孝昌三年 録文七五五、 六四七、彙二三二四④不明⑤觀世音像為貴中子願託 彙二二四○④一仏二菩薩⑤・・託生西方淨佛國土 延昌二年(五一三)②古陽洞西壁第三〇龕③録文八四 弟子⑤・・ 年(五一二)②古陽洞第二七○龕あるいは第二六九龕③ 囲に五三仏 西壁第三一龕③NANO一一一X④龕頂上に六飛天、 右壁大龕主尊一 〔五二七〕②皇甫公洞③彙二六二八拓本、NANO〇三一五 八七六拓本④一交脚菩薩二弟子二菩薩、一仏?二菩薩二 區并五十三佛為亡母願亡母託生西方妙樂國土・⑥延昌元)正光二年(五二一)②古陽洞 方安樂之處值遇諸佛 菩薩六比丘⑤・ 華樹下三會説 蓮華化生、 軀願使託生西方妙樂國土··又願身平安遇與弥勒 ②蓮華洞北壁第六五龕③彙一一四〇拓本④二仏並 9①正光五年 造弥勒像二區使亡父母託生紫微安樂之處·⑦① 一交脚菩薩二菩薩二蓮華化生⑤・・敬造弥勒 彙二六一三④一仏二菩薩⑤・・ 菩薩坐像⑤・・ 維摩文殊⑤・・ 法・・ 造多寶佛兩區 5①永平四年 (五二四) 13①永熙二年 願生安養・・ :南壁東第一三六龕③録文 造釋迦像籍此微功願令亡 ②火焼洞東壁第四龕③ 左大龕主尊二仏 五 一 一 (五三三) 離三徒八難託 12①大昌元年 造釋迦像 ②古陽 (五二七) 2 趙客 8 生 安樂 像 洞 倶

> **5** 薩二力士飛天維摩文殊⑤・造釋迦像一區在窟願亡父母託 仏 南 天上安樂之處值遇諸佛・・⑤①造像様式から北魏②古陽洞 ②蓮華洞北壁第六六龕③彙一一四一 師 洞前 區友師忘者神生西方静土値諸佛・・国①永熙二年(五三三 壁第一 仏二弟子二菩薩、二化生像維摩文殊⑤・・ 造釋迦牟尼佛多寶佛二區・・ :壁第一一龕③録文四七二、彙一 七九龕③録文〇六九一、 彙二三五二④二仏並坐 恒遇諸佛同生妙洛遊之 拓本④一仏二弟子二菩 四三二④龕上に六坐 造釋迦

薩(5) 魏字 量壽佛1區 有形之類速勝妙景及七世父母所生父母因属知識常與遇弥勒 弟子⑤・・無量壽□□夫託生西□ くり明らかに託生西方願望を示す造像記には★印を付け X④一仏二弟子二菩薩⑤・・敬造無量壽供養⑥①孝昌二年 仏二弟子二菩薩⑤・・割資産造無量壽佛斯願天下一切含牛 六三三龕③NANO一七七X④一仏二菩薩尖拱龕上方八 (五一九) 無量寿仏を主尊とする全ての造像記」 |唱恒登先道・・③①正光三年 11①★神亀元年 涧 龕③NANO○二三三X④一倚坐仏二弟子⑤··造無 ·南壁第八龕③NANO〇二三八X④一仏二弟子二菩 (五二六) 敬造無量壽像 ②古陽洞南壁第一七三龕③NANO二〇二X④ 1願長命老壽恒侍佛因緣但①正光四年 ②魏字洞南壁第三龕③NANO○三○ (五一八) ②彙第六三二龕、 一堪顚亡者離苦得樂普津法界[5]①孝 願 0 ②火焼洞東壁第]供2①神亀二年 無量壽仏像を <u>E</u> っ

②① 永煕二年(五三三)②古陽洞北壁第一九五龕③NANの二九七×⑤・・敬造無量壽像一驅願出至天郷三有群少同律法澤普登正覚⑦①孝昌二年(五二六)②魏字洞南壁第五律法澤普登正覚⑦①孝昌二年(五二六)②魏字洞南壁第五年(五二七)②蓮華洞北壁第九○龕③NANO三○八×④一仏二菩薩⑤・敬造無量壽像一驅願出至天郷三有群少同人二菩薩⑥・敬造無量壽像一驅願出至天郷三有群少同

生願託彼國

「□①★造像記中の「願」の字が北魏在銘願造像記のそれと回○★造像記中の「願」の字が北魏在銘願造像記のそれと回じなので北魏制作と推定②古陽洞北壁第一六○龕③彙同じなので北魏制作と推定②古陽洞北壁第一六○龕③彙に直縁為己身眷属造無量壽像一區願生生世世値佛聞法・・・

華洞』一二三頁拓本④一倚坐仏二菩薩維摩文殊⑤大統寺比との造像様式比較で北魏と推定②蓮華洞北壁第四一龕③『蓮優望を示す造像記』の⑪孝昌三年銘蓮華洞北壁第五四龕像得□値遇諸佛⑩⑪前傾「無量寿仏以外を主尊とし託生西方の三六四X④一仏二菩薩⑤・・敬造無量壽像一區・・離苦の三六四X④一仏二菩薩⑥・・敬造無量壽像一區・・離苦

にも掲載されている。 五二(二)二〇一〇年、表一「北朝・隋代の無量壽像銘」 五二(二)二〇一〇年、表一「北朝・隋代の無量壽修銘ーついては、倉本尚徳「北朝・隋代の無量壽・阿彌陀像銘ー ついては、倉本尚徳「北朝・隋代の無量壽・阿彌陀像銘ー

『龍門石窟碑刻題記彙録』上下巻、中国大百科全書出版社、出典資料の略称と略称」 [彙、拓本]:劉景龍・李玉昆主編

文」『龍門石窟の研究』京都大学人文科学研究所、一九四一年。所ウェブ公開漢籍管理番号、 [録文]:水野清一・長廣敏雄「録一九九七年の拓本写真。[NANO]:京都大学人文科学研究

華洞 龍門石窟第七一二窟』科学出版社、二〇〇二年大百科全書出版社、一九九九年。[[蓮華洞]]:劉景龍編著 [蓮[總録]]:劉景龍・楊超傑『龍門石窟總録』全一二巻、中国

- (47) 前掲註(1)『鴻慶寺石窟』一五六頁。
- 『佛教藝術』第三三〇号、二〇一三年。 統文化からみた龍門石窟―唐代の「場」を中心とした試論―」(名) 石松日奈子、前掲註(2)書、一六三頁。拙稿「中国伝)

[図版出典]

- 五二、六、一五、一〇、一七、七三、八一、八三。 『鴻慶寺石窟』中州古籍出版社、二〇〇八年、図版五、(図1、3、4~8、10、11)河南省古代建築保護研究所編
- 科学研究所、一九五三年、図版三九。(図2)水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』第九巻、京都大学人文
- 二〇一〇年、図二四。 (図9)『洛陽周囲小石窟全録』第二巻三一頁、外文出版社、

感謝する。
「付記」本稿作成のため鴻慶寺石窟を調査するにあたり、塩沢裕
「付記」本稿作成のため鴻慶寺石窟を調査するにあたり、塩沢裕